

148 のまよけ さくあと 野馬除の柵跡



指 定 市 史 跡 昭和35年 8 月15日
 所在地 御 牧 原
 所有者 個 人 所 有



牧では、放牧した馬が外へ逃げださないようにしたり、あるいは馬をきまった場所へ追い立てたりするために、放牧地の周囲に土手を築き、その上に木の柵（これを格という）をめぐらした。なお、これには両縁が高く、中央がくぼんだ空堀のような形状のものもある。こうした牧の遺構が、「野馬除の柵」あるいは「駒飼いの土手」などとよばれる土塁状の遺構で（いうまでもなく格は遺っていないが）、望月牧の跡である御牧原台地上には、これがかなりよく遺っている。

すなわち、北御牧の池久保・御牧上地籍に、あわせて約1,000m遺っている。また、千曲川に面した小諸市大久保地籍の宮脇付近にも約1,000m遺っている。なお、地元の人々はここを「駒止」とよんでいる。

浅科地域では、御牧原の富士見塚から西方へ下る山腹と、それを過ぎた小高い山中に遺っており、また東方の入の沢方向と、明神平方向にも遺っている。富士見塚から八幡山の嶺づたいに望月百沢へ向かったところにも断続的に遺っている。さらに、御牧原の尾尻東方の山中には、字唐沢へ向かって約400mほど、きわめてよい状態で遺っている。西行塚付近でも西方へ向って遺っている。

こうした配置から考えると、望月牧の柵は、放牧地から馬を逃がさないためというよりは、きまった場所へ馬を追い立てるために設けられたものと考えられている。